

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學におけるTOEIC L&R IPスコアの上昇傾向の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-17 キーワード (Ja): TOEIC L&R IP, 複数回受験, 上昇量, 習熟度, オンライン キーワード (En): multiple-test takers, score increase 作成者: 柳瀬, 弘美, 土肥, 充 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001483

國學院大學におけるTOEIC L&R IPスコアの上昇傾向の分析

柳瀬 弘美・土肥 充

【要 旨】

本研究の目的は、國學院大學で9年にわたり実施されてきたTOEIC L&R IPの得点を詳細に分析することによって全学的に共通し、他大学にも該当する傾向を明らかにし、今後の分析や学生への動機付けに供することである。土肥・久保田（2022）が、TOEIC L&R IPを複数回受験した國學院大學の学生の傾向を分析した結果、統計的に有意な上昇があることが確認されたが、本研究ではその後3年間に実施されたデータを加え、合わせて2015年度から2023年度まで計65回、延べ17,271名に対し実施した結果を包括的に分析した。その結果、より信頼性の高い分析が可能になった。今回の研究は、複数回受験した2,543名の受験者のListeningとReading別、および上位層、中位層、下位層別の上昇の傾向、オンライン版とマークシート版の比較、等について詳細な分析を行いTOEICの結果の解釈の一助となることを目的とする。

【キーワード】

TOEIC L&R IP、複数回受験、上昇量、習熟度、オンライン

1. はじめに

コロナ禍で数年規模にわたって停滞した留学、ビジネス、海外旅行等の国際交流活動が復調し、その一方でインターネット技術、とくにオンライン会議の発達により、在宅で外国人との交流も可能な時代となった。生成AIの技術が進歩しても、実際の国際交流において生身の人間が言語を駆使してコミュニケーションすることの重要性は低下していない。

國學院大學においては日本のほとんどの大学と同様に英語授業の履修を必修とし、「英語の健康診断」としてTOEIC、TOEFL等の外部テストの受験も推進している。一部の大学のように、全学生に対して1年間隔でTOEICの受験を義務付けているような場合、1年ごとに全学生の平均点や分布等を比較することにより、比較的簡単に大学全体としての英語学修の成果を示すことができる。しかしながら本学の場合は、1年次に一回無料で団体受験制度のTOEIC L&R IPの受験を義務付け、それ以降は希望者に有料で学内における受験機会を提供するのみである。1年次と高学年の平均点を単純に比較しても、受験者層が異なるため公平な比較ができず、誤った結論を導くことになりかねない。土肥・久保田（2022）（以下、「前回の研究」と呼ぶ）は、本学における2015から2020年度のすべてのTOEIC L&R IPの結果を収集し、ひとりひとりの学生の追跡調査をすることにより、各学生がスコアをいつ、何点上昇（または下降）させたかをデータ化し、複数回受験者の初回から最終回までの「対応のあるデータ」を使って、全体の傾向を分析するという研究を

実践した。数年間にわたる延べ1万名を超えるビッグデータから数千名の複数回受験者を抽出して分析するという手法は、共著者の前任校である千葉大学と本学における独自の研究手法であり、過去数十年の学会誌等を見ても同様の研究は見当たらない。

今回の研究は、前回の研究の発展版である。前回の研究の6年分のデータに2021から2023年度の3年分のデータを加えることで、より信頼性の高い結果を再現できることを期待した。しかし本研究は、単にデータの年数と人数を増やして、同じ研究方法を繰り返しただけではない。本研究の特徴としては、(1) Totalだけでなく、ListeningとReadingの内訳に踏み込んだ分析、(2) 上位層、中位層、下位層に分けてのListening、Reading、Totalの分析、(3) マークシート方式とオンライン方式の結果の比較、等があげられる。前回の研究は千葉大学における研究を発展させて國學院大學に応用したものであり、研究手法の統一性を保ちながらも、新たな知見を積み重ねた一連の研究シリーズとして位置付けている。研究シリーズを概観することにより、全学的に共通し、他大学にも該当する傾向を明らかにできると考えた。また、本学の教職員や学生だけでなく、他の英語学習者にとっても学習の成果がどのように表れるかという意味で、研究結果を動機付けにも活用できると期待している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3つである。

- ・ 國學院大學において過去9年間に義務的受験と任意受験によってTOEIC L&R IPを受験した延べ人数17,271名全員分の記述統計を示す。
- ・ 上記17,271名全員のデータから、同テストを複数回受験した学生2,543名を抽出することにより、各学生の在学中の初回受験時の得点から最終受験時までの得点上昇量の傾向を示す。分析は受験回数、初回受験時得点の視点から行い、また総合得点だけでなく、ListeningセクションとReadingセクションのそれぞれの得点上昇量についても分析する。
- ・ 上記分析により、今後の英語学修指導に有効な学生の得点上昇の傾向を明らかにする。

3. 研究の方法

前回の研究で収集した2015年度から2020年度のデータに、2021年度から2023年度までのデータを追加したTOEIC L&R IPテスト実施回数計65回延べ17,271名分のTOEICデータから、受験回数が1回のみの受験者のデータを除いた複数回受験者2,543名のデータを抽出する。そのデータからさらに各学生の受験回数、初回受験日、最終回受験日、初回から最終回までの受験間隔、初回受験時のListeningの得点、Readingの得点、両者を合算したTotalの得点、同様に最終受験時のTotal, Listening, Reading得点、および初回受験か

ら最終受験の間の得点の上昇量を算出し、その結果について、初回受験時の習熟度別の観点から得点上昇の傾向を分析する。また、Totalの得点上昇量の分析と同時に、各学生の得点をListeningとReadingに分け、各セクションの得点上昇の傾向の分析を行い、複数回受験者の得点上昇量の総合的な傾向を示す。最後にマークシート方式とオンライン方式のスコアの比較をする。

(1) 國學院大學で実施したTOEIC L&R IPテスト実施日と受験人数

2015年度から2023年度の9年間に実施された65回、受験者数延べ17,271名の内訳を表1にまとめた。

表1 TOEIC L&R IP 実施日と受験者数

2015年度	5/30(208)、7/11(178)、10/24(209)、12/5(218)、1/9(175)、2/5(250)	6回 1,238名
2016年度	5/28(246)、7/9(225)、9/20(120)、10/29(92)、12/3(154)、2/9(218)、3/13(212)	7回 1,267名
2017年度	5/20(238)、7/15(263)、9/4(216)、10/28(201)、12/2(217)、1/31(1,689)*、2/9(232)、3/14(130)	8回 3,186名
2018年度	7/7(261)、9/4(92)、9/11(27)、10/27(124)、12/1(178)、12/25(1,717)*、2/14(199)、3/12(189)	8回 2,787名
2019年度	5/18(187)、7/13(164)、9/6(100)、10/26(56)、12/14(17/6)、1/30(1,645)*、2/13(141)、3/13(103)	8回 2,572名
2020年度	11/28(40)、12/5(26)、12/19(69)、2/12(145)、2/26(92)、3/12(89)、3/26(142)	7回 603名
2021年度	5/15(140)、6/12(87)、7/10(95)、10/9(119)、12/11(135)、12/24(653)*、2/25(134)	7回 1,363名
2022年度	5/14(123)、6/11(91)、7/9(107)、10/29(107)、12/10(114)、2/10(1279)*、3/16(84)	7回 1,905名
2023年度	5/13(128)、6/10(96)、7/8(98)、8/1(1633)*、10/28(121)、12/9(148)、2/13(126)	7回 2,350名

2列目の各回の表示形式は、月／日（受験者数）で、*は1年生のみが義務的に受験した回。

表1のうち、*を付した6回8,616名の試験日は1年生のみが義務的に無料で受験した。なお、受験申込の際には「個人情報の取り扱いについて」と題する文書にデータ分析のために得点情報を利用することを示し、各学生の署名によって同意を得たが、本論文には学生個人の氏名や得点等の個人情報を含まず、集団としての統計分析結果のみを示した。

(2) 学科別、学年別の記述統計

全65回で受験した延べ17,271名のデータを16の学科等（学科および専攻）と「その他」に区分して人数、平均点、標準偏差（SD）、最高点、最低点をTotal、Listening、Readingに分けて表2に示した。表内の「その他」とは、正規の学部生以外である大学院

生や科目等履修生等である。本研究では学科等の名称を匿名化し、Totalの平均が高い順にA～P学科と表記した。今回は学科別の英語力について誤解を与えぬよう、あえてこの表記法をとった。國學院大學では学科等を示す英字の略号があるが、本論文の表記はこれとは無関係である。Listening SectionおよびReading Sectionそれぞれの理論的最高点と最低点は495点と5点で、その合計であるTotalの最高点と最低点は990点と10点であるが、TOEICテストの詳細と全国での各種集計結果については、国際ビジネスコミュニケーション協会（2024）を参照されたい。なお、表2のListeningで0点という表記があるのは、聴覚障害のある学生がReadingのみ受験してListeningを受験しなかったからである。この学生は1回のみ受験しているため、後述する複数回受験者の得点上昇のデータへの影響はない。

表2 学科等に区分した記述統計

学科等	人数	TOTAL				Listening				Reading			
		平均	SD	最高	最低	平均	SD	最高	最低	平均	SD	最高	最低
A	3040	516.0	134.18	950	130	240.4	70.76	495	0	225.7	74.48	465	5
B	1351	435.6	141.56	900	115	245.1	76.03	495	5	190.4	75.46	435	35
C	422	428.4	136.87	850	135	242.8	73.97	460	95	185.6	73.14	395	5
D	404	422.8	135.92	875	150	237.3	73.88	475	80	185.5	71.55	400	55
E	270	421.2	119.73	845	105	238.8	67.77	450	95	182.4	62.92	395	5
F	1535	419.8	138.73	940	60	239.2	73.34	490	55	180.6	74.84	460	5
G	1382	417.9	124.26	895	10	233.1	66.84	475	5	184.8	67.57	440	5
H	1788	408.2	118.82	840	20	231.9	64.88	465	15	176.3	65.31	425	5
I	2736	406.5	125.09	910	100	231.7	69.45	485	35	174.9	66.72	455	5
J	712	399.9	125.08	870	120	228.4	68.06	470	55	171.5	66.96	410	5
K	716	398.8	135.22	905	15	230.7	76.18	480	5	168.1	69.01	425	5
L	502	377.3	113.75	805	90	216.4	66.26	415	65	161.0	58.82	390	5
M	756	369.6	132.78	870	125	211.8	72.97	475	75	157.9	68.35	415	50
N	216	360.1	116.95	785	115	212.8	69.83	415	0	147.3	57.13	360	60
O	557	356.5	115.57	820	145	209.2	68.83	470	70	147.3	55.91	380	45
P	822	342.0	131.24	955	40	200.2	75.27	485	35	141.8	65.24	480	5
その他	51	584.8	153.10	950	300	312.9	75.19	490	185	271.9	84.90	470	115
全学生	17271	423.7	138.82	955	10	240.7	75.24	495	0	183.0	73.20	480	5

(3) 受験間隔別、受験回数別の分析

國學院大學では、1年生および編入生に対し、TOEIC受験を義務化している。前述の表2のデータは、義務的に受験した1年生8,562名および編入生54名と、任意受験した学生延べ8,655名の両方を含んでいる。本論文の研究では、各学生が複数回受験した場合の得点の上昇量とその傾向を観察することを主な目的としているため、以降の分析では、受験回数が1回だけの学生は除外する。9年間で実施された全65回の受験者延べ17,271名のうち、2回以上受験した学生の実人数は2,543名であった。この2,543名の各受験回数を考慮せず、初回から最終回までの期間を算出すると、平均は440.8日であった。同様に初回と最終回の得点のみに注目し、これら複数回受験者のTotal, Listening, Readingの上昇量の平均を算出すると、それぞれ60.2、32.8、27.4であった。t検定の結果はそれぞれ $t =$

29.325, $t = 27.871$, $t = 22.739$ で、1%水準で有意であり、Cohenの効果量はそれぞれ $d = .47$, $d = .48$, $d = .39$ であった。

複数回受験者2,543名全員の初回のTotal, Listening, Readingの得点を原点にそろえ、横軸を最終回までの年数（1年ごと）、縦軸を上昇量（100点ごと）として、各学生の点数の上昇および下降を直線によって示した図1を見ると、初回受験から最終受験までに得点が下降した学生もいるが、全体的に見ればTotal, Listening, Readingとも上昇している。ListeningとReadingの図を比較すると、傾向としては同様であるが、若干の違いが見られる。この違いには、前述したように平均してListeningよりReadingの上昇量が小さいことが影響している。

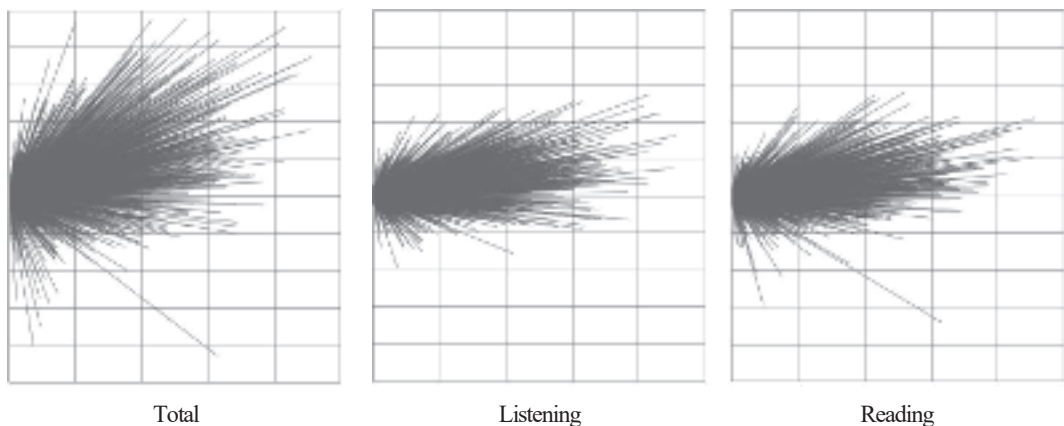


図1 複数回受験者全員の得点上昇量

複数回受験者を受験回数ごとに分け、人数、受験間隔（平均）、Total, Listening, Reading別の得点の平均上昇量を、受験回数ごとに表3に示した。図1は横軸で経年を示し上昇量を表しているのに対し、表3では回数別に上昇量を算出しているが、回数が多いほど年数が多い傾向があるため、図1と表3を対比させながら分析する。図1では、最終受験で大きく得点を落としている学生も見られるが、表3のどの回数を見ても平均点は上昇している。この傾向が図1の、Total, Listening, Readingのどの図でも線が集中している部分が、やや右上がりの楕円になっていることに現れている。

表3を視覚的にわかりやすくするため、データを回数別に分け、それぞれ左から、Total, Listening, Readingの上昇量を示したグラフ（図2）にすると、どの回数でもListeningの上昇量がReadingの上昇量を上回っている。Total, Listening, Readingのいずれの平均も回数を経ることによって増える傾向が明らかになるが、9回目以降では順調な上昇が止まっている。9回受験した学生が18名、10回以上受けた学生が24名と他の回数に比べて少ないことが影響している可能性もあり、必ずしも10回以上受験すると得点の上昇がしにくくなるということを表すものではない。しかしその9回目以降でも、Listening

の上昇量がReadingの上昇量を上回っていることは興味深い。

表3 受験回数別上昇量

受験回数	人数	受験間隔(日)	上昇		
			T	L	R
2	1349	306.5	30.9	16.7	14.1
3	540	484.7	68.1	28.9	21.3
4	278	572.9	84.5	48.9	35.5
5	166	626.4	118.9	65.0	54.0
6	100	760.0	126.1	70.0	65.0
7	39	758.4	144.1	78.7	67.4
8	33	887.1	178.0	92.1	85.9
9	10	955.2	136.9	77.2	59.7
10+	24	1108.7	158.8	85.2	73.5
全国数	2543	440.8	60.2	32.8	27.4

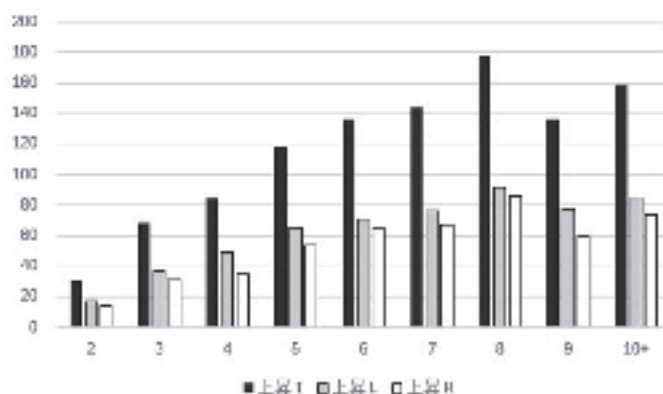


図2 受験回数別得点上昇量

(4) 習熟度別の分析

複数回受験した学生2,543名を初回受験時のTotal得点により、上位層（500－955点）、中位層（400点－495点）、下位層（155－395点）に分け、それぞれの得点平均および上昇量をまとめると表4のようになる。Total, Listening, Readingの平均上昇量はそれぞれ、上位層では42.19, 23.92, 18.27、中位層では、59.98, 32.8, 27.18、下位層では78.06, 41.55, 36.51であった。t 検定の結果は上位層では $t = 11.67$, $t = 12.11$, $t = 8.24$ で、Cohenの効果量はそれぞれ $d = .38$, $d = .39$, $d = .28$ となり、中位層では $t = 17.14$, $t = 16.40$, $t = 13.25$ で、効果量はそれぞれ $d = .5$, $d = .49$, $d = .41$ 、下位層では $t = 22.61$, $t = 19.81$, $t = 18.81$ で、効果量はそれぞれ $d = .61$, $d = .56$, $d = .54$ とすべての層で平均点の上昇は1%水準で有意であった。どの層も平均点の上昇が有意であることが明らかになったが、その量は層によって異なり、上位層と下位層の上昇量差は大きい。

表 4 初回受験時得点別 得点上昇量

初回得点(Total)	人数	初回受験時			最終受験時			得点上昇量		
		Total 平均	Listening 平均	Reading 平均	Total 平均	Listening 平均	Reading 平均	Total 平均	Listening 平均	Reading 平均
上位層(500-655)	830	565.64	520.88	265.81	627.88	344.25	283.58	42.19	23.32	18.27
中位層(400-495)	866	443.7	240.82	133.88	508.06	282.02	221.06	59.58	32.8	27.18
下位層(155-555)	847	332.69	155.88	138.87	410.75	237.87	173.88	78.06	41.55	35.01
全体	2543	453.05	254.85	198.2	513.25	287.68	225.58	60.18	32.81	27.38

各上昇量を上昇T (Total)、上昇L (Listening)、上昇R (Reading) に分け、それぞれ左側から、下位層、中位層、上位層の順に示したグラフ (図 3) で、Total, Listening, Readingの上昇量を比較した。すべてのセクションにおいて、下位層の上昇量が大きく、上位層はそれに比べて少ない。一見すると上位層が伸び悩んでいるように見えるが、これは比較的低い得点の方がその後、得点を伸ばしやすく、得点が高くなるほど伸ばすことが困難になるという一般的な傾向を示している。また、筆者の企業勤務の経験からして、実務で英語を使う場合、簡単な意思疎通でもやはり600点以上は必要と指摘されることが多く、これは600点以上が、実際に実務で使える最低限のレベルであり、それ以下の中学高校英語のレベルと難易度が異なり、得点上昇が困難になるものと考えられる。

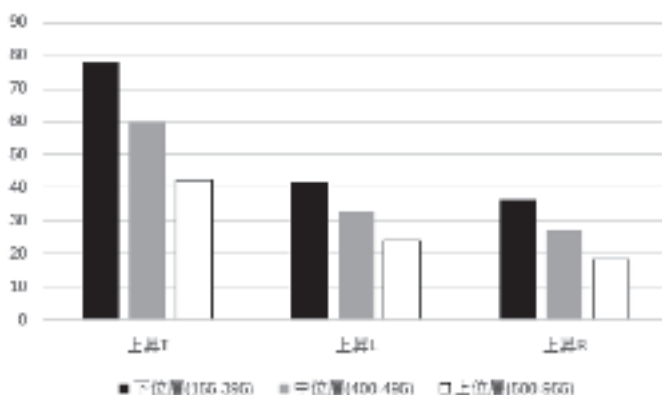


図 3 初回受験時得点別 得点上昇量比較

初回の Total の得点を100点ごとに分け、各レベルの初回受験から最終受験までの Total の上昇量をグラフ化すると (図 4) 下位層の得点上昇量が多く、上位に近づくにつれ減少するという傾向は図 3 と同様であるが、800点以上の高得点者の上昇量の平均がマイナスになっていることがわかる。初回受験時の得点が高ければその後にそれよりも得点をとることは困難になるということもあるが、単純に「難しい」ということだけが理由とは言えない。

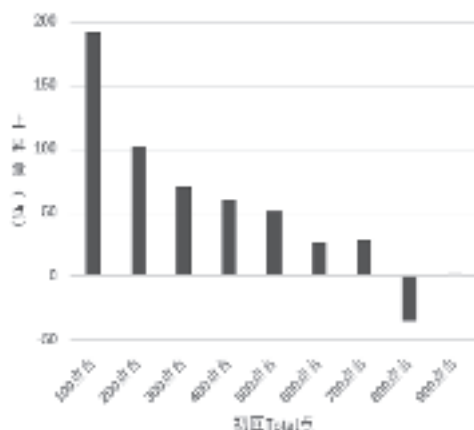


図4 初回Total得点別上昇量

ListeningとReadingの上昇量を初回受験時の得点別に分け、それぞれの上昇量を比較すると、初回受験時の得点の高低にかかわらず、Readingの方がListeningより上昇量が少ないという図3と同じ傾向が現れる（図5）。このグラフには、Listening得点が10点～49点のデータが無いが、最低得点が75点であったため表示する対象者がおらず空白となっている。図4ではTotalの得点が800点以上の学生の上昇量がマイナスになっているが、図5を見ると、Listening, ReadingともマイナスになっているのではなくListeningは上昇しているが、Readingの上昇量の減少がそれを相殺し、その結果マイナスとなっている場合も多い。また初回450点以上の高得点者ではListening, Readingの両方において上昇量がマイナスになっているが、450点以上の受験者は、全員で6名と少人数であったので、必ずしも一般的傾向を示しているとは言えない。しかしその少人数の中でも半数がReadingの上昇量の方が伸び悩んでいた。図3、図5の両方のグラフから、初回受験時の得点が上位層であっても下位層であってもListeningに比べReadingは得点の上昇が難しい傾向がうかがえる。

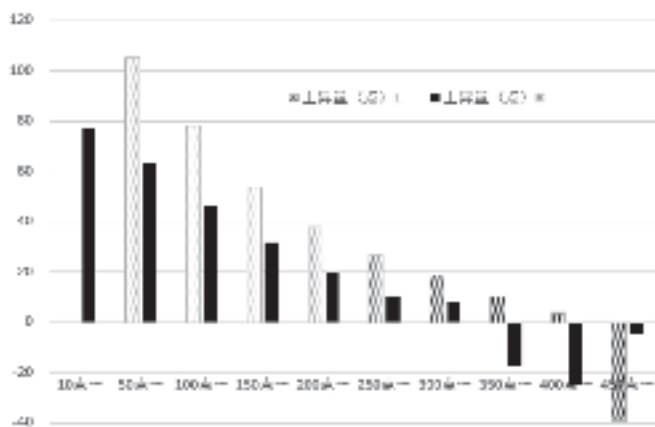


図5 初回受験時得点別 Listening, Reading別得点上昇量

(5) マークシート方式とオンライン方式のスコア比較

TOEIC L&Rは若干の改定を加えながら、1979年以来45年以上実施されている。国際ビジネスコミュニケーション協会（2024）によると、偏差値を活用したスコアの算出により、「異なるフォームから換算したスコアが全ての受験者にとって比較可能かつ公平なものになる」とされている。本研究のデータは団体受験制度のTOEIC L&R IPのスコアであり、その大部分は従来からのマークシート方式のものである。その一方で、コロナ禍の2020年からオンライン方式のTOEIC L&R IPも導入され、本研究の一部のデータもオンライン方式によるものが含まれる。両方式のスコアの意味は同じであるとされているが、テスト時間、問題数、解答方式、受験者層、等が異なるテストのスコアを本当に同じものと信じてよいかどうかについては、若干の疑問も生じる。テスト開発者のETSは信頼性を示す具体的なデータを公開しておらず、また、複数の学会や大学等の過去数年の研究論文や報告書等を調査しても、そのような研究は見当たらなかった。本研究では、調査対象とした9年間（2015～2023年度）とは別に、2024年5月に25名の学生が両方式を受験した場合について分析することにした。

具体的には、本学の学生25名が有料で2024年5月11日に教室における対面形式でマークシート方式のTOEIC L&R IPを受験し、同じ25名が無料で5月7日から5月31日の間にオンライン方式で受験した。そのスコア分布を図6に示したが、マークシート方式は最高725、最低235、平均428.2、標準偏差118.4であり、オンライン方式は最高795、最低130、平均408.8、標準偏差151.16であり、t検定の結果が $t = .95$ で有意差はなく、Cohenの効果量は $d = .14$ であった。相関係数は $r = .738$ で強い相関が認められた。25名という受験者数が多くはなく、高得点者も多くないという制約はあるが、本研究の過去9年間のスコアの解釈および今後のスコアの解釈において、マークシート方式とオンライン方式による差はないものと結論した。

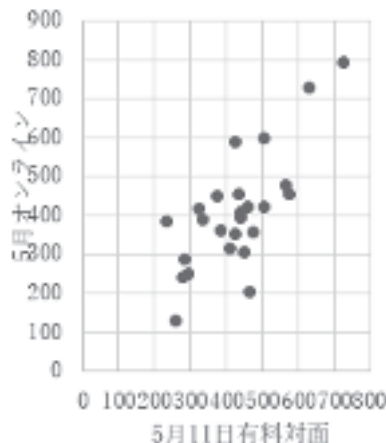


図6 対面方式・オンライン方式 スコア分布

4. 考察

本研究では、2015年度から2023年度の9年間65回にわたり実施されたTOEICテスト受験者、延べ17,271名のうち、複数回受験した学生2,543名に対し、初回受験から最終受験までを追跡し、平均点の上昇を確認した。また初回受験時の得点別で見た場合、その後の得点の上昇量が、下位層ほど大きく上位層ほど小さくなることも確認できた。一部の学生、特に初回で高得点を得た学生について、最終受験回の得点が初回に比べ下降しているように見えても、単純にListeningとReadingの両方の得点が減少したのではなく、どちらかが上昇しどちらかが下降しているという事態があり得ることも確認できた。また、どの視点からの分析でもReadingよりListeningの方が得点が増加する傾向が見られ、前述の図5では、初回受験時のReading、Listeningの得点が350点以上の上位層の場合においては、最終受験時Readingの得点がより顕著にマイナスになる傾向も見られた。今回のデータでは明らかにできなかったが、Readingの伸び悩みについては、Listeningの方が使われる語彙が限られる傾向があり、音声に慣れることによって伸びやすく、その一方で、Readingは語彙の難易度が高い傾向にあり、ただ読むことに慣れるだけでは対応できず、これに加え、限られた時間で読み終わるという速読力が必要であるが、速読の訓練を受けていない学生がほとんどであることが理由として考えられる。

今回の分析の結果は、はじめは得点が低かった学生も、時間をかけ学習に励むことにより、よい結果を得ることができるということの根拠となる。同時にこの分析結果は、学生個人の努力で下位層から上位層に分類されるような得点を得るようになったものの、その後伸び悩む可能性が高いことをも表している。しかしそれは一般的な傾向であり、その学生個人の努力不足や能力の低さを表すものではなく、挫折することなく学修を続けることにより、必ず得点は上がっていくと説明する根拠ともなり得る。この論文で対象とした9年間のデータは、マークシート方式とオンライン方式の両方を含むものであり、どちらで受験しても同様な結果が得られるのか以前は未確認であったが、2024年度にマークシート方式とオンライン方式の両方で受験した学生の得点を分析した結果、スコアの解釈に差はないことが判明し、今回の研究で対象としたデータは信頼できるものと確認された。

5. 今後の課題

本論文では、複数回TOEICを受験した学生の得点上昇の傾向が明らかになった。しかし、なぜListeningに比べてReadingの得点の方が上昇しにくいのか、また、初回受験時に高得点だった学生の得点上昇量がマイナスになる場合において、なぜReadingの得点の方が下降しやすくなる傾向があるのかについての原因を述べるに十分なデータは得られていない。これらについて、今後の研究で詳細な分析が必要である。また中位、上位層の「伸びしろ」がまだ残っているはずの学生たちが、なぜ得点の伸び悩みを見せるのかを説明す

る具体的なデータは不足している。この点に関しても、さらなる研究が必要である。

現在多くの企業が就職活動をする学生にTOEICの点数の提示を求めており、また大学院、特に法科大学院への進学の場合、入学試験時にTOEIC760～800点という高スコアの証明書の提出が必要となることも多い。國學院大學で十分に専門知識を学んだ学生が、TOEICの得点で希望する将来をあきらめなければならないことのないよう在学中の英語学修のサポートするためには、多くの学生の得点の変化について、できる限り多くのデータを収集し、分析を進め、様々な原因を見極めることが肝要である。英語力の異なる各学生に対する効果的な指導方法を見出すために、今後もデータの収集を継続し、学修指導に役立つ具体的な知見を得るため、得点上昇や下降に影響を与える要因の分析を継続したい。

謝辞

本研究の遂行にあたり、教職員や学生の皆様をはじめとする多くの方々のご協力をいただいた。また、論文の執筆に際し、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会と匿名の査読者より有益な助言をいただくこともできた。ここに記して感謝を申し上げる。

6. 主な参考文献

- 土肥充,「TOEIC IPによる千葉大生の英語力の現状分析」,『人文と教育』,千葉大学国際教育開発センター,第2号,pp.15-29, <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900040929/KJ00004373969.pdf>, 2006. (2021年10月20日閲覧)
- 土肥充・久保田正人,「國學院大學におけるTOEIC L&R IPのスコア分析」,『國學院大學教育開発推進機構紀要』,國學院大學教育開発推進機構,第13号,pp.57-67, https://opac.kokugakuin.ac.jp/webopac/kyoikukaihatsu_013_005._?key=LAQXJZ, 2022. (2024年9月1日閲覧)
- 土肥充・柳瀬弘美,「千葉大学におけるTOEIC IPスコアの包括的分析」,『言語文化論叢』,千葉大学言語教育センター,第3号,pp.31-45, <https://www.cphe.chiba-u.jp/ge/activity/archive/pdf/plc03-06.pdf>, 2009. (2021年10月20日閲覧)
- 土肥充・張智君,「千葉大学におけるTOEIC IPとTOEFL ITPのスコア分析と経年調査」, <https://www.cphe.chiba-u.jp/ge/activity/archive/pdf/plc08-02.pdf>, 2014. (2021年10月20日閲覧)
- Educational Testing Service, The TOEIC Program —The Global Leader in English-language Assessment for the Workplace, <https://www.ets.org/toEIC/>. (2021年10月20日閲覧)
- 久保田正人・土肥充,「國學院大學の英語教育」,『教育開発ニュース』,國學院大學教育開発推進機構,第21号,pp. 2-5, <https://img-kokugakuin.com/assets/uploads/2020/10/iatnews21.pdf>, 2020. (2021年10月20日閲覧)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会,「TOEIC ProgramテストDATA & ANALYSIS 2024-2023年度受験者数と平均スコア」, https://www.iibc-global.org/hubfs/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf?hsLang=ja (2024年10月08日閲覧)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会,『FAQ よくあるご質問と回答集』, https://www.iibc-global.org/hubfs/library/default/toEIC/corpo/official_doc/toEIC_material/pdf/Quality%20perspectives%20of%20the%20TOEIC%20Program_FAQ.pdf?hsLang=ja, (2024年10月19日閲覧)

Analysis of the Trends in TOEIC L&R IP Score Increases at Kokugakuin University

Hiromi YANASE and Mitsuru DOI

Abstract

The purpose of this study is to clarify universal trends by conducting a detailed analysis of the TOEIC L&R IP scores collected over many years at Kokugakuin University, and to contribute to future analysis and student motivation. Doi and Kubota (2022) confirmed a statistically significant increase in the scores of Kokugakuin University students who took the TOEIC L&R IP multiple times. This study incorporates data from the following three years after Doi and Kubota (2022) study, analyzing a total of 65 tests from the academic year 2015 to 2023, involving 17,271 students. As a result, a more reliable analysis has been achieved. This study not only follows the methods of Doi and Kubota (2022) but also provides a detailed analysis of the trends in Listening and Reading scores for 2,543 examinees who took the test multiple times. Additionally, it includes score increases classified by upper, middle, and lower tiers, as well as a comparison between the online and paper-based formats. The findings of this research are believed to be a general trend that applies not only to Kokugakuin University but also to other universities.

Keywords : *TOEIC L&R IP; multiple-test takers; score increase; proficiency level; Online*